

# 論点

## 移民政策 世界が考える時



羽場 久美子氏

青山学院大学教授。専門は国際政治、EU・欧州政治。著書に「拡大ヨーロッパの挑戦」「EU(欧州連合)を知るための63章」など。

が根強い。

それは市民権を持ち、自由と民主主義を学んだものの、現実には市民として正當な扱いを受けずに差別され、疎外感を抱いているからである。この不満が域内テロの温床になっている。

アバウド容疑者も不良化し、刑務所に収監中、ISの過激思想に触れ、共感したとされる。

無視できないのは、こうした若者への、インターネットを通じたISの影響力

である。欧州からは、多くの移民2世、3世がISへ渡航している。アバウド容疑者もその一人だったと言われる。彼らは高い情報技術(IT)を持ち、YouTubeを通じてISのメッセージを発信し、それがまた世界の不満を抱えた若者たちを刺激している。

ISがITネットワーク上でテロを呼びかけると、過激思想に感化された移民2世、3世が犯行に及び、ISが犯行声明を出す、という構図である。

故に、フランスや米露のシリアへの空爆は効果的とは言いがたい。130人のテ

昨年11月のパリ同時テロは、先進国首都での事件とあって、広く世界を震撼させた。過激派組織IS(イスラム国)の犯行と断定され、フランスは報復攻撃として空爆を実施した。だが、この事件はフランス対ISの国際紛争であろうか。本事件は、フランス国籍やベルギー国籍を持つ欧州連合(EU)市民による犯行、いわゆるホームグロウ

ン・テロと呼ばれる域内テロである。首謀者アブデルハミド・アバウド容疑者もベルギー国籍を持つモロッコ移民の子弟だ。EUの多くの国では、自国で生まれた移民の子弟に国籍と欧州市民権が付与さ

れる。欧州市民権は、EU域内を自由に移動でき、どの国でも教育・医療・社会保障を受ける権利を有する制度である。ただ、皮肉なこと、欧州市民権を獲得した移民2世、3世は、1世よりも欧州社会への不満

が根強い。それは市民権を持ち、自由と民主主義を学んだものの、現実には市民として正當な扱いを受けずに差別され、疎外感を抱いているからである。この不満が域内テロの温床になっている。

である。欧州からは、多くの移民2世、3世がISへ渡航している。アバウド容疑者もその一人だったと言われる。彼らは高い情報技術(IT)を持ち、YouTubeを通じてISのメッセージを発信し、それがまた世界の不満を抱えた若者たちを刺激している。

ロの犠牲の報復として、数十万のシリア市民に犠牲を与えるような空爆は、イスラム原理主義者の報復とテロ活動をさらに促進させる。報復の連鎖である。

一方、欧州の中間層の貧困化が、移民排斥の動きにつながっている。貧困化自体はグローバル化やユーロ

危機を要因としている。加えて、テロ事件が中間層の右傾化を強めている。先のフランス地域圏議会選挙の第1回投票では、極右の国民戦線が躍進した。

EUは「多様性の中の統合」を掲げるが、実現は容易ではない。欧州には50

00万人を超える移民と数十万人のシリア難民があふれている。欧州にとどまらず、国際社会はイスラム諸国民との協働を真剣に考える時期にきている。

人口減少や社会の多様性を考える上でも、移民とテロは極めて重要な課題を提起している。少子高齢化と

人口減少という現実、移民の受け入れが日本においても検討課題であることを示している。

重要なことは、テロ事件で移民や難民の排斥に向かうのではなく、いかに多様性を尊重し共存しつつ、安全を確保するかであろう。